

# 巻 頭 言

高崎健康福祉大学  
竹内 伸行

昨年10月29日に高崎健康福祉大学において第30回群馬県理学療法士学会が開催されました。同学会最多の参加者の皆様をお迎えし、活発な議論が行われました。ご参加いただいた皆様、演者の皆様、学生ボランティアを含む運営スタッフおよび学会関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

さて、理学療法士の専門性を読者の皆様はどのようにお考えでしょうか。視点はいくつもあると思います。例えば、日本理学療法士協会の認定制度や専門制度の区分も専門性を表現する方法の一つだと思います。あるいは、勤務先の施設の特徴（整形外科、脳神経外科など）も臨床経験をもとにした専門性を表現する方法として間違いではないでしょう。理学療法士の職域は多岐にわたります。これは理学療法士が社会的に求められているということであり、我々にとっては望ましいことだと思います。一方、学術的な側面でも、理学療法“学”は一言では言い表せないほどの領域があります。日本理学療法学会連合は15の法人学会と5の研究会から構成されており、もはや一人の理学療法士が全ての領域を学ぶのは困難です。ジェネラリストとスペシャリストという言葉は聞いたことがあるかもしれませんが、現状ではこれらすべてに精通したジェネラリストとしての理学療法士になるのは現実的ではないように思います。ジェネラリストを否定するわけではありませんし、複数の領域にかかわる知識や技術を身につけた理学療法士は、多くの臨床場面において必要です。筆者は大学教員という立場上、細々とではありますが研究を行っています。その成果を日本理学療法学会連合とは無関係の学会で発表することも少なくありません。そのような学会では、理学療法士としての学問的貧弱さを痛感することもあれば、逆に臨床経験に裏付けられた理学療法士ならではの“強み”を感じることもあります。理学療法士が将来にわたり社会的要請に応じていくためには、その専門性をどのように捉えて、どのように伸ばしていく必要があるのでしょうか。理学療法士が有する幅広い専門性を、活かすも潰すも、我々一人ひとりの考え方のかもしれません。

本誌は理学療法に関するあらゆる学術論文を幅広く掲載しています。様々な専門性を持つ読者の皆様には、有意義な議論を行うためのツールとして本誌を活用していただければ幸いです。